

学校規模別にみた小・中学校での特別支援教育

藤 嶋 杏 佳（愛知県立三好特別支援学校）

吉 岡 恒 生（愛知教育大学障害児教育講座）

要約 本稿では、小・中学校における特別支援教育の現状において、学校規模に着目し、質問紙調査およびインタビュー調査を実施し、学校規模ごとの長所や課題を検討した。その結果、以下のことが示唆された。小規模校の長所は、教員一人に対して児童生徒の数が少ないため、一人ひとりの児童生徒に対してきめ細やかで手厚い支援・指導がしやすいことである。一方で、特別支援教育を特定の教員に任せきりにしてしまうことが危惧されるため、全ての学校教職員が力を合わせて特別支援教育に取り組むことが課題と言える。中・大規模校では、特別支援学級の児童同士の関わりが多く生まれることから、仲間意識の形成やコミュニケーションの土台作りにつながるという長所があると言える。しかし、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒に対して、教育的ニーズに対応した支援を十分に行っていくことが難しく、学校の特別支援教育のシステムづくりが課題である。

キーワード：特別支援教育，特別支援学級，学校規模

I. はじめに

平成19年、学校教育法等の一部改正が施行され、障害のある全ての幼児児童生徒の教育の一層の充実を図るために、特別支援教育の推進が求められるようになった。特別支援学校だけではなく、小・中学校においても、特別支援教育を充実させる取り組みを行っていく必要がある。また、平成24年4月、義務標準法の改正により、地域や学校、児童生徒の実情に応じた、より柔軟で効果的な特別支援学級の設置が可能となり、現在特別支援学級の数が増加傾向にある。小・中学校の特別支援教育の課題は常に存在し、様々な対応が求められていると言える。共生社会の形成に向け、児童生徒一人ひとりの教育的ニーズを理解し、全ての子どもに対して適切な支援・指導が行われるためには、各学校の特徴を捉え、その特徴を活かしながら、支援体制を整え特別支援教育を実践していくことが大切である。その重要な特徴の一つに「学校規模」がある。学校の児童生徒数に関係なく特別支援教育は充実させていくべきであるが、学校規模によってその取り組み方や課題は異なっていると考えられる。

餅原ら（2008）は、小規模校の特別支援教育コーディネーターとしての課題について、「業務がコーディネーター任せ」「時間的余裕がない」といった課題をあげている。小規模校では、少ない教員で多くの役割を担う現状から、一人ひとりの負担の大きさを示唆している。また、後藤ら（2006）は、小規模校群よりも大規模校群の方が、特別支援のための教員の加配が必要であるという意見が多くあがったことから、大規模校では、児童の多さなどから、教員数を増やすことが児童に対する細やかな支援や指導へとつながるという意識が高いことを指摘している。

そうした事情を踏まえて本研究では、小・中学校に

における特別支援教育の学校規模ごとの長所や課題を明らかにし、今後の特別支援教育のありようについて検討していくことを目的とする。

そこで、各小・中学校の学級総数が小学校では4～31学級、中学校では4～28学級と、大小様々な規模の学校が存在しているA市を調査対象市とし、小・中学校の特別支援教育の実態を調査していく。その際、学校の規模に焦点をあて、質問紙調査およびインタビュー調査を行う。これらの調査結果を踏まえ、学校規模による特別支援教育の特徴や課題を比較検討する。

II. 調査方法

（1）質問紙調査

①調査対象者・方法

平成27年10月、A市教育委員会が開催する特別支援教育コーディネーター研修会に参加した小・中学校の特別支援教育コーディネーター102名（小学校75校、中学校27校）に質問紙を配布。研修会終了後、その場で調査用紙を回収した。小学校からは65校、中学校からは26校の回答を得た。（回収率はそれぞれ86.7%、96.3%であった。）

②調査内容

I. 学校の特別支援教育体制について（特別支援教育コーディネーターの職階、特別支援学級の学級数、特別支援学級の障害種と在籍児童生徒数、特別支援教育支援員の配置人数）

表 1 学校の特別支援教育体制の内訳

属 性	内 容	学校数 (校)	割合 (%)
規模	小学校	大規模	16 24.6
		中規模	15 23.1
		小規模	26 40.0
		過小規模	8 12.3
	中学校	大規模	9 34.6
		中規模	7 26.9
		小規模	10 38.5
		過小規模	0 0.0
特別支援学級の有無	小学校	あり	49 75.4
		なし	16 24.6
	中学校	あり	26 100.0
		なし	0 0.0
特別支援教育支援員の配置	小学校	0名	21 32.3
		1名	21 32.3
		2名	12 18.5
		3名以上	10 15.4
	中学校	0名	10 38.5
		1名	9 34.6
		2名	5 19.2
		3名以上	2 7.7
特別支援教育コーディネーターの職階	教頭		46 52.9
	教務主任		29 33.3
	公務主任		8 9.2
	特別支援学級担任教諭		3 3.4
	養護教諭		1 1.1
	その他		4 4.6

Ⅱ. 学校規模を踏まえた特別支援教育の現状と課題について (i.学級数, ii.過小・小規模, 中・大規模それぞれの学校規模における特別支援教育の長所6項目ずつを4段階評定(1:全くそう思わない, 2:あまりそう思わない, 3:少し思う, 4:非常に思う)), iii.特別支援教育の課題への対応の達成度15項目を5段階評価(1:全く達成できていない, 2:あまり達成できていない, 3:どちらとも言えない, 4:やや達成できている, 5:十分に達成できている)

(2) インタビュー調査

①調査対象者・方法

質問紙調査にて同意を得た教諭15名のうちの3名に、質問紙調査での回答をもとに、45分～1時間程度のインタビューを行った。

表 2 インタビュー対象者のプロフィール

対象校	対象者	職階	規模	総学級数 (特支学級)
B 小学校	C	教務主任	過小	4 (1)
D 小学校	E	校務主任	大	24 (3)
F 中学校	G	教頭	小	8 (2)

②調査内容

- ・学校の規模ごとの長所について
- ・十分に達成されていないと考える特別支援教育の課題項目についての困難さの理由
- ・十分に達成されていると考える特別支援教育の課題項目についての具体的取り組み
- ・現在務めている学校と、今まで赴任した小・中学校の比較(特別支援教育の特徴や課題, 規模の差・学校種・支援級の有無による比較。)

なお、本調査では、学校の規模については学級数によって括ることとし、公立小・中学校の国庫負担事業認定申請の手続きの「学校規模の分類」より、4区分として整理した。なおこの分類では、学級数には、特別支援学級の学級数は含まないものとする。また、過小規模校と小規模校を「小規模校群」、中規模校と大規模校を「中・大規模校群」とした。

表 3 学校規模の分類

小規模校群	過小規模校	小学校5学級以下 中学校2学級以下
	小規模校	小学校6～11学級 中学校3～11学級
中・大規模校群	中規模校	12～18学級
	大規模校	19学級以上

Ⅲ. 結果

(1) 質問紙調査の回答結果

①学校規模別に見る特別支援教育の長所について

ここでは、過小・小規模校及び中・大規模校のそれぞれの学校規模ならではの特別支援教育の特徴を調べるため、長所だと考えられる項目について、どのように思うか尋ねた。

過小・小規模校の長所について、長所だと思うとの回答が最も多かった内容は「一人ひとりにきめ細やかな支援・指導がしやすい。」と「特別な支援が必要な個々の児童生徒に対する教員の目が行き届きやすい。」が同数で44校中39校であった。次いで、「特別支援学級に在籍する児童生徒と通常の学級に在籍する児童生徒との関わりがうまれやすい。」が37校であった。(図1)

中・大規模校の長所について、長所だと思うとの回答が最も多かった内容は「特別支援学級に在籍する児童生徒同士の関わりが、多くうまれやすい。」で47校中41校であった。「教員数が多いため、組織的な指導や支援がしやすい。」が38校、「学校行事等が、活気あふれたものになりやすい。」が36校であった。(図2)

一方で、「特別支援教育に関する専門性(知識・理解)を備えた教員が多い。」の項目に対して「非常にそう思う」と回答した教諭は1人もいなかった。また、小学校と中学校の結果をそれぞれ見た場合では、また、小学校では6項目すべてにおいて、半数を超える教諭が長所だと思うと答えたが、中学校では「特別支援教育に関する専門性(知識・理解)を備えた教員が多い。」「特別な支援が必要な児童生徒の保護者同士のつながりがうまれやすい。」の項目は、長所と思わない(あまりそう思わない、全くそう思わない)と答えた教諭が半数を超える結果であった。

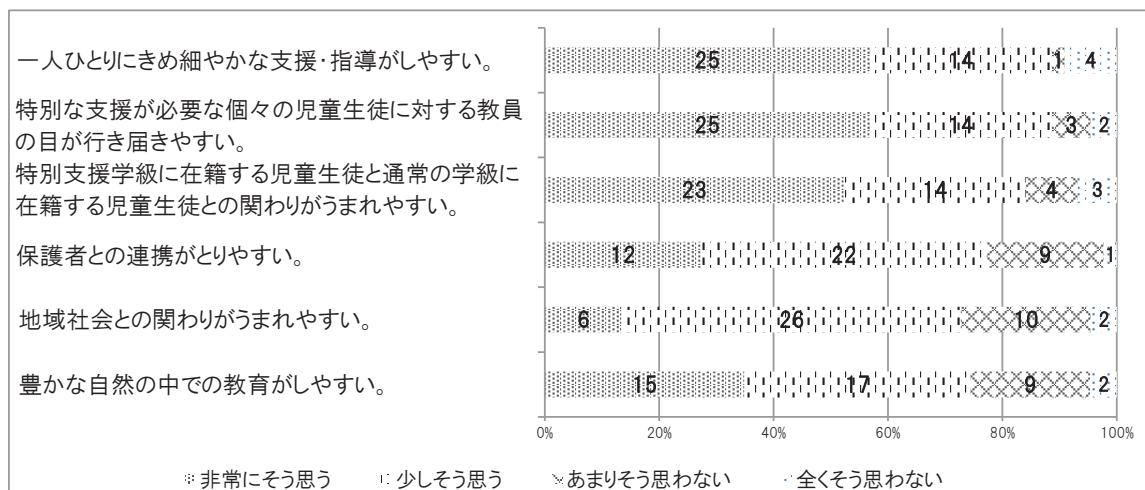


図1 過小・小規模校における特別支援教育の長所 (n=44)

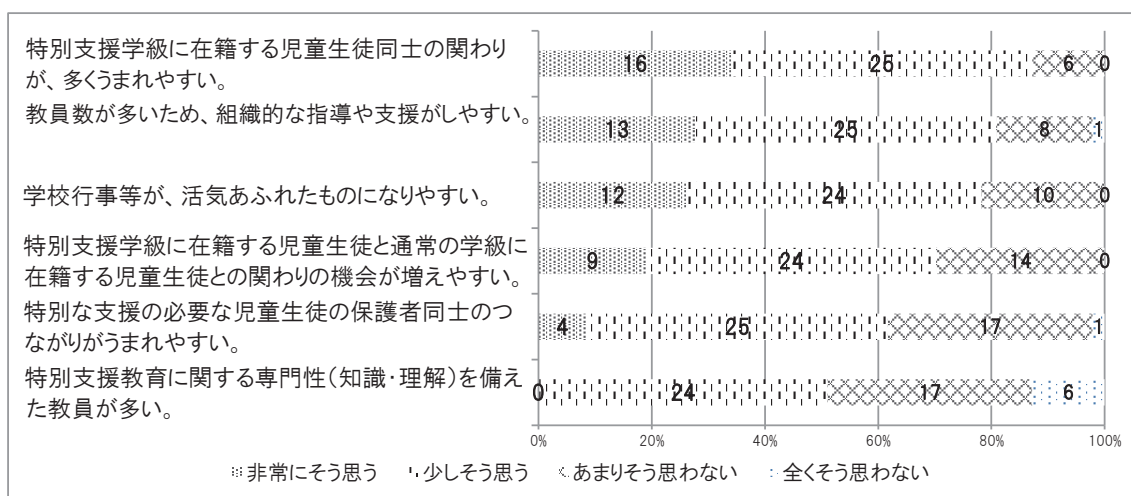


図2 中・大規模校における特別支援教育の長所 (n=47)

②特別支援教育の課題への対応の達成度について

特別支援教育の課題への対応の達成度について、過小・小規模校と中・大規模校の2群から見る。

過小・小規模校において、達成度の高い（十分に達成できている・やや達成できている）との回答が最も多かった内容は、「特別な支援が必要な児童生徒に対しての教員間の共通理解」で、44校中39校であり、得点が一番高かった。次いで、「児童生徒の障害に対する正しい理解を得ること」、「特別支援学級に在籍する児童生徒とそれ以外の児童生徒との交流を増やすこと」で37校であった。また、達成度の低い（あまり達成できていない・全く達成できていない）との回答が最も多かった内容は、「特別支援教育の理解を促すた

めの地域社会への啓発」，次いで，「特別支援教育支援員の加配」であった。

中・大規模校において、達成度の高い（十分に達成できている・やや達成できている）との回答が最も多かった内容は、「特別な支援が必要な児童生徒に対しての教員間の共通理解」で47校中41校であり、得点が最も高かった。次いで、「特別支援学級に在籍する児童生徒とそれ以外の児童生徒との交流を増やすこと」で39校であった。また、達成度の低い（あまり達成できていない・全く達成できていない）との回答が最も多かった内容は、「特別支援教育の理解を促すための地域社会への啓発」，次いで「支援のための教員の人数」であった。（表4）

表4 特別支援教育の課題への対応の達成度についての項目の平均と標準偏差

質問項目	平均 (SD)	
	過小・小 44校	中・大 47校
1. 児童生徒の障害に対する正しい理解を得ること	4.00 (0.57)	3.77 (0.70)
2. よりよい授業を行うための、教材・教具の工夫	3.55 (0.63)	3.47 (0.88)
3. 特別支援学級に在籍する児童生徒とそれ以外の児童生徒との交流を増やすこと	4.25 (0.84)	4.06 (0.76)
4. 特別な支援が必要な児童生徒に対しての教員間の共通理解	4.34 (0.68)	4.09 (0.72)
5. 特別支援教育に費やす時間的余裕	3.19 (0.70)	2.98 (0.82)
6. 保護者支援の充実	3.75 (0.75)	3.42 (0.83)
7. 特別支援教育の理解を促すための地域社会への啓発	2.73 (0.69)	2.53 (0.91)
8. 特別支援学校との連携・協力	3.09 (1.07)	3.26 (0.99)
9. 専門機関から学校への巡回訪問	3.46 (0.98)	3.36 (0.90)
10. 就学相談の充実	3.84 (0.78)	3.64 (0.64)
11. 通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援	3.91 (0.68)	3.60 (0.83)
12. 校内委員会の機能強化	3.82 (0.66)	3.57 (0.80)
13. 特別支援教育の支援予算の充実	2.96 (0.91)	2.69 (0.82)
14. 支援のための教員の人数	2.86 (1.03)	2.75 (0.99)
15. 特別支援教育支援員の加配	2.79 (1.12)	3.00 (1.10)

表5 各学校群における、特別支援教育の課題の達成度の平均値（標準偏差）とt検定の結果

	小学校				中学校			
	過小・小規模校群 (<i>n</i> =34) <i>M</i> (<i>SD</i>)	中・大規模校群 (<i>n</i> =31) <i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>df</i>	<i>t</i> 値	小規模校群 (<i>n</i> =10) <i>M</i> (<i>SD</i>)	中・大規模校群 (<i>n</i> =16) <i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>df</i>	<i>t</i> 値
1. 児童生徒の障害に対する正しい理解を得ること	3.91 (0.57)	3.84 (0.65)	60.48	0.64	4.30 (0.48)	3.63 (0.81)	24	2.67 *
9. 専門機関から学校への巡回訪問	3.35 (1.04)	3.55 (0.85)	62.28	0.83	3.80 (0.63)	3.00 (0.89)	24	2.67 *
4. 特別な支援が必要な児童生徒に対する教員間の共通理解	4.35 (0.65)	4.32 (0.60)	62.98	0.20	4.30 (0.82)	3.63 (0.72)	24	2.13 *
10. 就学相談の充実	3.79 (0.82)	3.71 (0.59)	58.08	0.44	4.00 (0.67)	3.50 (0.73)	24	1.79 +
7. 特別支援教育の理解を促すための地域社会への啓発	2.70 (0.73)	2.35 (0.71)	61.91	1.90+	2.80 (0.63)	2.88 (1.15)	24	0.21
11. 通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援	4.03 (0.63)	3.74 (0.73)	59.51	1.70+	3.50 (0.71)	3.31 (0.95)	24	0.58

*: $p < .05$, +: $p < .10$

表6 各学校種における、特別支援教育の課題の達成度の平均値（標準偏差）とt検定の結果

	小学校 (<i>n</i> =65) <i>M</i> (<i>SD</i>)	中学校 (<i>n</i> =26) <i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>df</i>	<i>t</i> 値
11. 通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援	3.89 (0.69)	3.38 (0.85)	38.69	2.71 *
4. 特別な支援が必要な児童生徒に対する教員間の共通理解	4.34 (0.62)	3.88 (0.82)	37.08	2.56 *
15. 特別支援教育支援員の加配	3.06 (1.06)	2.48 (1.16)	40.32	2.18 *

*: $p < .05$

表7 小学校の特別支援学級の有無の、特別支援教育の課題の達成度の平均値（標準偏差）とt検定の結果

	特別支援学級無し (<i>n</i> =16) <i>M</i> (<i>SD</i>)	特別支援学級有り (<i>n</i> =49) <i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>df</i>	<i>t</i> 値
11. 通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援	4.31 (0.60)	3.76 (0.66)	27.84	3.14**
4. 特別な支援が必要な児童生徒に対する教員間の共通理解	4.63 (0.50)	4.24 (0.63)	31.91	2.47 *

**: $p < .01$, *: $p < .05$

その後、特別支援教育の課題への対応の達成度について、学校規模ごとの結果を比較検討した。小学校と中学校の学校規模ごとについて、過小・小規模校群と中・大規模校群の比較を対応のある t 検定（両側）をWelchの方法により行った。

小学校では、「特別支援教育の理解を促すための地域社会への啓発」（ $t(61.91) = 1.90, p < .10$ ）、「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援」（ $t(59.51) = 1.70, p < .10$ ）の2項目について過小・小規模学校群の方が中・大規模校群に比べて達成度が高い有意傾向が見出された。また、中学校では「児童生徒の障害に対する正しい理解を得ること」（ $t(23.99) = 2.67, p < .05$ ）、「特別な支援が必要な児童生徒に対しての教員間の共通理解」（ $t(17.27) = 2.13, p < .05$ ）、「専門機関から学校への巡回訪問」（ $t(23.52) = 2.67, p < .05$ ）の3項目において、小規模校群の方が中・大規模校群に比べて達成度が有意に高かった。（前ページ表5）

③学校規模の相違以外にみられる小・中学校の特別支援教育の特徴について

質問紙の結果から、「学校規模」の違いに加えて、「学校種」の違いや「特別支援学級の有無」によっても特徴が見出された。

i. 学校種の違い（前ページ表6）

「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援」（ $t(38.69) = 2.71, p < .05$ ）、「特別な支援が必要な児童生徒に対しての教員間の共通理解」（ $t(37.08) = 2.56, p < .05$ ）、「特別支援教育支援員の加配」（ $t(40.32) = 2.18, p < .05$ ）の3項目については、小学校群の方が中学校群に比べて達成度が有意に高かった。

ii. 特別支援学級の有無（前ページ表7）

特別支援学級のない学校のほうが、特別支援学級のある学校よりも「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援」（ $t(27.84) = 3.14, p < .01$ ）、「特別な支援が必要な児童生徒に対しての教員間の共通理解」（ $t(31.94) = 2.47, p < .05$ ）の内容に対して達成度が有意に高い結果となった。

（2）インタビュー調査の回答結果

表2に示したように、質問紙調査の結果を踏まえて、過小規模小学校のC先生、大規模小学校のE先生、小規模中学校のG先生にインタビューした。以下に、それぞれの学校規模に特徴的なテーマに焦点を当てて、彼らの発言をまとめる。

①小規模校の特別支援教育の長所と課題について

i. 小規模校における特別支援教育の長所

一人ひとりにきめ細やかな支援・指導がしやすい。

（C先生）大規模校に比べ、特別な支援を必要とする児童の数が少なく、対応できる人員が揃っているため、一人ひとりに対してきめ細やかに支援することができる。

（G先生）生徒の数が少ないため、生徒の名前を覚えることができ、すべての教員が生徒に対して声をかけやすい関係ができている。

地域社会との関わりがうまれやすい。

（C先生）地域には昔から地元に住んでいる人が多いため、学校のことをよくわかってくれており、協力的である。学校行事の案内等も地域のすべての家庭に配布しているため、地域の人々が学校へ関心を持ってきている。

（G先生）生徒の登下校中などに、地域の方が声をかけたり、子どもの様子を見て学校に報告してくれたりする。

特別な支援が必要な個々の児童生徒に対する教員の目が行き届きやすい。

（C先生）児童は少人数であるため、支援が必要な児童に対して、すべての教員が目が行き届かせないといけないという意識を持っている。

（G先生）職員の意識として、一人ひとりが特別支援学級の子どもたちに声をかけるようにしている。生徒が教員全員を知っているということは、子どもたちの安心にもつながる。

ii. 特別支援教育の課題項目について

特別な支援が必要な児童生徒に対しての教員間の共通理解

（C先生）特別支援教育コーディネーターとして、研修等に参加して得た情報を、必ず全職員に伝えるようにしている。特別支援学級の担当者だけではなく学校の教員全員が、「支援が必要な児童に対して支援をしていくことが当たり前だ」という心の土台を持っていてもらえるようにしている。そうすれば、他の学校にいったときでも、特別支援学級の担任の先生におまかせにするなんてことはしないだろうし、みんなで育てていくという意識になると思う。

（G先生）特別支援学級の担任ではないが、学校には特別支援に関する知識や経験のある者がいるので、その人を通して周りの教員が学べるような組織を作っていこうとしており、校内委員会では、知識のある教員から、他の教員が学べるような場となるように心がけている。また、特別支援学級担任の教員以外の教員が授業を担当して子どもとかわる機会を増やすようにしている。子どもの理解につながるし、特別支援教育の学びにもなると考えている。特別支援教育に関心のある校長先

生や特別支援教育コーディネーターの先生がいなくなっても残るような、システムをつくっていくことが大事であると思う。

②大規模校の特別支援教育の長所と課題について

i. 大規模校における特別支援教育の長所
特別支援学級に在籍する児童生徒同士の関わりが、多くうまれやすい。

(E先生) 特別支援学級は3クラスあるが、体育、図工、家庭科など3クラス7人が合同で行う授業がある。通常の学級との交流会や誕生日会など、クラス合同で行う活動で関わりが生まれる。

特別支援学級に在籍する児童生徒と通常の学級に在籍する児童生徒との関わりが増えやすい。

(E先生) 全学年が縦割りでグループを作り、交流する活動を設けている。交流学級の児童だけでなく、他の学年の児童との関わりもうまれる。特別支援学級の児童の班には、特別支援学級の担任がついているため、特別支援学級の子どもと通常学級の子どもが上手に交わるようにアドバイスができています。

ii. 特別支援教育の課題項目について

支援のための教員の人数

(E先生) 特別支援学級は現在一クラスに一人の担任であるため、休み時間もずっと子どもに目を向けておく必要がある。休み時間や、子どものトイレについていくときなど、担任がもう一人いたほうが理想的であると感じている。改善できるかどうかは分からないけれど、もっと人がいるとありがたいと思っている。

IV. 考察

(1) 学校の特別支援教育体制について

現在A市の全ての小・中学校で特別支援教育コーディネーターが指名されている。特別支援教育コーディネーターは、教頭または、教務主任が務めている場合が多い。中には、校務分掌を複数兼任している教員もあり、その学校は小規模であることが多い。小規模校では教員の人数が少ないため、多くの教員が複数の校務分掌を受け持っている。そのため、一人ひとりに対する事務業務の負担が大きくなる可能性があると言える。また、特別支援教育支援員が加配されている学校は、小学校で66%、中学校で58%である。市の予算の都合上、希望する全ての学校に特別支援教育支援員の加配を行うことが難しい現状がある。そのため、A市では、特別支援教育支援員の他に非常勤職を設け、特別支援教育支援員の加配の不足問題について対応している。その他にも、予算の見直しや、学生支援ボランティアの受け入れなど、教員以外の支援員の増加が

求められている。

(2) 小規模校の特別支援教育の長所と課題

質問紙調査やインタビュー調査で、小規模校の特別支援教育の長所として、「一人ひとりにきめ細やかな支援・指導がしやすい。」こと、また、「特別な支援が必要な個々の児童生徒に対する教員の目が行き届きやすい。」ことをあげる教員が多くいた。学校教職員が少数の児童生徒を、より近いところで見守ったり支援したりすることのできる小規模校の特別支援教育の最大の長所は、教員一人に対して児童生徒の数が少ないため、一人ひとりの児童生徒に対してきめ細やかで手厚い支援・指導がしやすいことである。また、特別支援学級担任や特別な支援を必要とする児童の在籍する学級担任などが、巡回訪問や教育相談などを要望する際、職員の少ない小規模校のほうが、特別支援教育コーディネーターに相談しやすい環境にあるのではないだろうか。教員が少ないため、子ども自身の感じている生活での困り感や、学級担任が感じている支援・指導での困り感を、他の教員と共有することが容易なだと推測できる。そのため、「教員間の共通理解」や、「専門機関との連携」について小規模校の方が達成度が高かったと考えられる。

また、質問紙調査では、70%を超える学校が、「地域社会とのかかわりがうまれやすい」ことを長所（非常にそう思う・少しそう思う）だとあげた。小規模の小学校では特に、保護者や地域社会の人々など、多くの人々に見守られながら、学校生活や日常生活を送っているという特長があると考えられる。特別支援学級に在籍する子どもだけでなく、学校に在籍するすべての子どもが、まわりのたくさんの人々の中で生活を送り、成長していくことのできる地域社会をつくることが望まれる。

学校が一丸となって特別支援教育の推進を行っていくことが望まれる小規模校において、最も危惧されることは、学校の特別支援教育を、特別支援学級担任や特別支援教育コーディネーターなど、特定の人に任せきりにしてしまうことである。小規模校で特別支援教育に関心をもつのが特定の教員に限られる場合、交流及び共同学習等子どもにとってよりよい支援が機能しにくく、学校の特別支援教育の推進は望めない。児童生徒や教員の人数の少ない小規模校だからこそ、特別支援学級担任、特別支援教育コーディネーターや、校長などの管理職などが中心となり、学校教職員が力を合わせて、子どものために学校の特別支援教育に取り組んでいく必要がある。

(3) 中・大規模校の特別支援教育の長所と課題

中・大規模校において、質問紙調査やインタビュー調査を通して共通する大規模校の長所は、「特別支援

学級に在籍する児童生徒同士の関わりが、多く「うまくいやすい」ことであった。質問紙では、中・大規模校のおよそ87%が、このことを長所である（非常にそう思う・少しそう思う）と回答した。（図2）大規模校のように、一つの特別支援学級に在籍する児童生徒の数が多い学校では、必然的に子ども同士が関わる機会が増える。仲間意識を持ちながら協力して行事に取り組んだり、授業の活動で学び合いが生まれたりする場合もあるだろう。また、友だちと関わるのが難しい比較的重度の障害のある児童生徒であっても、学級内の他の仲間の存在を意識しながら共に生活を送ることで、コミュニケーションの土台作りにつながったり、仲間の存在を意識することができたりすると考えられる。

質問紙調査の回答において、小学校における特別支援教育の課題への対応の達成度を学校規模で比較した結果、「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援」の項目について過小・小規模学校群の方が中・大規模校群に比べて達成度が高い有意傾向が見出された。大規模校は小規模校と比較し、学級内の特別な支援を必要とする児童生徒の数が多くなる可能性が高い。学級担任一人が、数十人いる学級の児童生徒の学習、生活面の指導を行いながら、特別な支援を必要とする子ども一人ひとりに対して、その子の教育的ニーズに対応した支援・指導を十分に行っていくことは、大変難しいことであるだろう。学級担任が一人で問題を抱え込まず、同じ学年の教員を頼ったり、特別支援教育コーディネーター、専門機関など周りに相談したりして、よりよい支援・指導を考えていくことが大切である。そのためには、学校の特別支援教育のシステムづくりが課題となってくる。

また、質問紙調査の回答において、中・大規模校の42%が、「支援のための教員の人数」の課題への対応の達成度が低い（あまり達成できていない・全く達成できていない）と回答した。学級担任一人が、クラス全員をきめ細やかに見ることは難しく、かつそれを補う支援のための人手は足りていない状況である。そのため、自治体に対して、特別支援教育支援員や、支援のための教員、ボランティア等の充足が求められている。

（4）学校規模の相違以外にみられる小・中学校の特別支援教育の特徴

①学校種の違い

小学校群のほうが3項目において有意に達成度が高かったが、その理由として、まず、担任システムの違いが考えられる。小学校が学級担任制であるのに対し、中学校は教科担任制である。中学校では、教員は自分のクラスの子どもだけではなく、顧問をしている部活動の生徒や、教科担任をしている複数の学級の生

徒など、小学校に比べ、より多くの子どもに目を向ける必要がある。対して小学校は、自分の担任している学級の子どもをより深く細かく見ることができするため、1クラスの人数の少ない特別支援学級の児童だけでなく、「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする子ども」にも目を向けやすく、支援をしていくことができるのではないかと考えられる。

また、A市では、小学校のほうが中学校に比べて小規模校の数が多い傾向があるため、相対的に、小学校のほうがこどもの人数や教員の人数が少ないといえるだろう。そのため、「特別な支援が必要な子どもに対しての教員間の共通理解」について、小学校のほうが、達成度が高いといえるのではないだろうか。

最後に、通常の学級の学習障害などの子どもに対する「特別支援教育支援員の加配」の需要が高くなる理由として、中学校で学習内容が難しくなっていくにしたがって、学習面でのつまづきが見られる子どもが増えることが挙げられる。一方で、特別支援教育支援員の数には予算の都合などから限りがあり、学校の理想とする加配の人数に追いついていないことから、このような結果となったのだと考えられる。

②特別支援学級の有無

筆者は、特別支援学級のある学校のほうが、特別支援教育について強い関心をもっている教員が多く、達成度は高い傾向にあると予想したが、特別支援学級のない学校のほうが、「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援」（両側検定： $t(27.84) = 3.14, p < .01$ ）、「特別な支援が必要な児童生徒に対しての教員間の共通理解」（両側検定： $t(31.94) = 2.47, p < .05$ ）の内容に対して達成度が有意に高い結果となった。特別支援学級のある学校では、ややもすると、特別支援教育は特別支援学級の子どもに対しての取り組むものであるという意識が強くなると予想される。そのため、通常の学級に在籍する支援の必要な子どもに対しての取り組みについては、特別支援学級の子どもに対するほど、意識が向かないのだろう。逆に、特別支援学級のない学校であれば、特別な支援の対象となる児童はすべて通常の学級に在籍することになるため、教員の意識がそちらに向きやすく、支援も充実していくと考えられる。このことが、「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への支援」において、特別支援学級のある学校よりも、特別支援学級のない学校のほうが、達成度が有意に高い結果をもたらしていると推測される。

このように、小・中学校間の違いや、特別支援学級の有無などでも結果に差が見られ、特別支援教育の課題に対する達成度は、一概に学校規模によるものだけではないことが示唆された。

それぞれの調査結果を検討していく中で、学校の特別支援教育に影響を与える特徴のひとつに、「学校の

特別支援教育の取り組みへの教員の意識」があると筆者は考えた。全ての学校において、特別支援教育について多くの先生が関心を持ち、意欲的に学校全体で特別支援教育の取り組みを行うのが理想であるが、現実にはそうとは言い切れない。

本研究では教員の意識や国・自治体の取り組みについては十分に踏み込めなかったが、今後、学校の教員の意識調査や、学校の特別支援教育に対する意識を高めるための、国や自治体の取り組みなどについて検討を重ねることで、小・中学校の特別支援学級の実態が浮かび上がってくるだろうと考える。

V. おわりに

特別な支援を必要とする子どもの増加や障害の多様化、インクルーシブ教育システムの充実などを背景に、今後ますます、小・中学校における特別支援教育の重要度は高くなるだろう。現在の小・中学校では、管理職が中心となり、すべての教員が特別支援教育に関わるものという意識を持って、学校全体での支援体制を構築していくことが求められている。この現状を踏まえ、学校教員は現在自分が勤めている学校の特別支援教育の取り組みや、特徴、課題が何であるかを把

握する必要があるのではないだろうか。自治体等が開催する特別支援教育コーディネーターや、特別支援学級担任を対象に開催される勉強会や交流会が増え、学校規模等の共通した特徴を持つ学校や、それ以外の様々な学校の特別支援教育に関する取り組みについて情報交換し、参考にしたりする機会も必要であると考ええる。

また、特別支援学校のセンター的機能や、各市町村の教育相談や特別支援教育支援員等の事業の活用、医療機関の利用など、様々な専門機関と連携をとり、保護者や地域社会との結びつきをより一層強くしていくことで、小・中学校の特別支援教育は、より推進されていくと考えられる。

VI. 参考文献

- ・ 後藤守ら（2006）「へき地小規模校における特別支援教育」（へき地教育研究 第61号 P37-46）
- ・ 餅原尚子ら（2008）「特別支援教育コーディネーターの認識状況に関する調査研究：学校規模、保護者への理解・啓発のありように視点をあてて」（鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要 第3号 P29-36）